

ご家庭での算数の教え方

数楽管理人 *i*

© 数学・算数を楽しむために (<http://www.enjoymath.sakura.ne.jp/index.html>)

1 理想

1.1 1つの理想

「ねえ、この問題教えて。」お子さんがこう言ってきたら、あなたはどうしますか。僕の理想は、その子にとって最低限のヒントを与えることです。加減が重要です。ヒントが多すぎてはいけません。お子さんの解く楽しみを奪ってしまうだけでなく、お子さんが成長する機会さえも奪ってしまいます。逆にヒントが不十分であれば、お子さんは解けません。とても難しい話ですが、加減が重要です。アドバイスをどれだけ簡潔に的確にできるか、僕は何年も追求しています。

アドバイスは短ければ短いほどいいと思います。一気に解答まで導けなくてもいいのです。段階をふんで一歩ずつ進めるようなアドバイスをすること。お子さんとのやり取りが何往復になろうとも、子供が自分で解答にたどり着けるようにケアしましょう。そうやって難問を解けたとき、お子さんは「できた実感」を得、算数が楽しくなっていきます。必ずお子さんの力になります。

1.2 もう1つの理想

最低限のヒントは加減が難しく、的確なアドバイスであるためには知識や経験も必要です。ご家庭では、時間的にも難しいかもしれません。そこでもう1つの理想についてお話ししましょう。それは「答えの○×のみを行う。」というものです。答えが○ならOK、×ならやり直しを繰り返すのみです。解説はしません。アドバイスもしません。極端な方法ですし、何も教えてません(笑)。ですがこれはとても有効な方法です。問題の選択が的確でさえあれば、算数にこれ以上の勉強方法はありません。本当にいい問題というのは、新しい解き方を発見できるようになっています。そんな問題を豊富に用意できるのであれば(それもその子供にとっていいタイミングで)、単に○×をするだけでその子の算数力は順調に伸びていくでしょう。

しかし実際この方法は時間的にもとても難しい方法かもしれません。多くのお子さんにとって現実的な方法ではないでしょう。ですから少しアレンジして、「×のときに少しヒントを言う。」、「×が三回続いたら塾で先生に聞く。」「5回×が続いたらその問題は次回しにする。」など、その子に合わせて調整して見て下さい。

1.3 もう1つの理想

塾に行っているのであれば、全てを塾に任せるという手もあります。遅かれ早かれ、人は1人で勉強できるようならなければなりません。早い時期から全てを自己責任でさせるというのも1つの理想であると言えます。

2 実例

2.1 作業をさせる

僕が生徒の質問に対して最初にチェックすることは、それまでの作業の様子です。何もせずに問題を持ってきて、「教えて」という生徒には、「何かノートに書いてから持ってきて。」と即答します。何かしてくるまでは何も教えません。

図形問題ならば、図形を描き、数値などを書き込むことは絶対させます。文章題なら、表で整理させたり、線分図や面積図などを書かせます。何もできないのであれば、その子にとってその問題は難しすぎるので、違う問題をさせた方がいいかもしれません。

次の段階は、生徒がしてきた作業を見て、それが的確かどうか判断します。的確であれば、その先を少しアドバイスし、的確でなければ他の方法を示唆します。単なる計算間違いなどであれば、もう1度させればいいでしょう。重要なことは、困難に出会ったときに自分の力でどうにかしようとする力を養うことです。教えることは少なければ少ないほどいいでしょう。教えられたものより、自分で発見したことの方が忘れません。ですから、手を動かして、色々な方法にトライさせましょう。ダメでも得られるものがたくさんあるはずですよ。

2.2 質問に質問で返す

生徒の質問に僕はよく質問で返します。生徒がどこまで理解しているのか確認するためです。

具体例をあげましょう。図形問題で何をしたいかわからない場合、「何を考えたか」「どれとどれが平行か」「どことどこが同じ角度か」「何と何が相似か」など、色々な質問をします。多くの図形問題で使えるテクニックとして、求めたい長さがあるときに、その長さを一辺とする三角形の相似を見つけることができれば、問題を解けます。図形の基本は三角形と言いながら、どの三角形に注目するのか、その子がどの三角形に注目しているのか、そういったことを確認します。その上で、「何と何が相似か」、そこからどことどこかの長さの比がわかるのか、そういったことを質問しながら誘導していくのです。

文章題であれば、何を書いたか確認します。文章題を解くときの基本は表と図です。論理的に難しい問題であれば、表や図で整理させましょう。表や線分図が書いてあれば、注目すべき部分（線分の差など）がいくらなのか質問したり、計算で求められそうな数値について聞きましょう。そう

やって解くために必要な計算を促します。

2.3 矛盾やミスをすぐに指摘しない

不思議に思われた方もいるでしょう。目的があります。その矛盾やミスに自分で気づいて欲しいのです。そのための訓練を普段から心がけたいのです。矛盾やミスを指摘することは簡単です。子供の作業を大人が見ればおかしいことだらけです。しかし安易な否定は子供の思考力・想像力を奪います。ミスを自分で見つけられない人間は、社会に出てから責任の重い仕事はできません。算数の訓練はそのためでもあります。矛盾に敏感になって欲しいのです。普段からそういうケアができれば、テストで自分のミスに気づけるようになります。

また、生徒の作業は作品であり、僕はそこに敬意と喜びを感じます。真っ向から生徒の作業を否定することは、それらを欠くことにつながり、生徒のやる気を殺ぎます。矛盾やミスを指摘せずに見守ります。もちろん答えは×します。しかし、なぜ間違えたかは自分で考えさせましょう。

どうしても気づかないときはどうしましょう。時間がない場合はどうしましょうか。お子さんの作業時間を短くするために、すぐミスを指摘することは一理あります。でも、それはお子さんの論理力を奪って、宿題を形として終わらせたに過ぎないことは認識しておいて下さい。僕なら、少なくとも5分は作業を待ちたいところです。もちろん実際の授業でミスをすぐに指摘することもよくありますが、このミスからこの子が得るものはほとんどないと判断した場合と、他の作業に時間が必要な場合に限ります。常に時間は制約になりますが、その子にとってのベストを考えたいし、考えて欲しいと思います。

さて、矛盾やミスをわからせるために僕が実際にしていることをあげたいと思います。ヒントを与えたり、矛盾を実感させるための助け船を出します。「太郎君の歩く速さが時速300kmだと、新幹線並みになるよ。」、「全体で何個ある？ そうだよな。2500個しかないのに、その部分が8000個っておかしくない？」、「計算途中に×3があるのに、答えが3の倍数ではないのはなぜ？」、「それだところちの線分の方が長さが大きくなるよね。だから、線分の長さを変えてもう1回図を描いてごらん。」など、数値や線分の大小比較や、実例を出したりするのが効果的です。

また子供は親や教師の様子に敏感です。ですから、こちらの態度から問題の○×を彼らは知ることがあります。僕は子供の答えを見ても、「ふーん」や「ほー」としか言わないことがあります。こちらの態度から○×をさとられないために、いい・わるいをわざと言わないで。「別の方法はないかな？ 別解でも同じ答えになればほぼ絶対正しいと言えるよね。」なんてことを言うこともあります。とにかく時間をあげて、矛盾やミスをすぐ指摘せず、時間が余れば(時には時間がなくても)別の方法を探させる。子供が自分で矛盾を見つけるまで、静かに見守ることが理想です。時間はかかりますし、大人としては忍耐が問われますが、それだけの価値があると思います。

2.4 簡単な例や具体的な例を示す

知識がなくて何もできないときによく使うのは、簡単な例題を目の前で解いてみせることです。知識的にまだまだの状態では仕方がありませんから、問題の数値を簡単にして、解法をみせます。少しひねって、逆算を考えて例題を出したりすることもあります。問題によってはこちらの方が効果的であることもあります。「 $5\frac{1}{3} - \square = 2.5$ 」を考えさせたいときに、「『 $5 - \square = 2$ 』の \square はどんな計算で求められる？ うん。 $5 - 2 = 3$ で求められるね。じゃあ、さっきの問題はどうすればいい？」というような誘導の仕方をよくします。

このように、例題で知識を教える方法は、問題の数値を簡単にして考えさせる手がよく使えます。その際も上のように、質問して、答えを待つことを繰り返すとより効果的でしょう。簡単な数字の場合、子供も計算は暗算できますから、解法を作業を通して覚えることができます。

それから、「1, 2, 3 で考えろ」という言い方もよくします。1人のとき、2人のとき、3人のとき、そこにある法則に気づくことができれば、数字が大きくなっても問題が解けます。「1分のとき、2分のとき、3分のとき、どこにいるか、どんな状態か、描いてごらん。」、「100人のとき、99人のとき、98人のとき、…、入場料金はいくら？ 表でまとめてごらん」などです。中学生で習う文字式でも、1, 2, 3, …で具体的に考えさせ、 x ならどうなるかよく考えさせています。この抽象化能力は中学で習う数学の最重要テーマの1つで、そのために算数で訓練させておきたいポイントでもあります。

3 しない方がいい教え方

ここで僕がこれらの教え方はしたくないというものをまとめたいと思います。

1. 計算を親がする。(親ができてもし方がありません。)
2. ミスをすぐに指摘する。(上記参照。)
3. テキストの解答解説をなぞる。もしくは読み上げる。(テキストの解答解説は答えに誘導するために用いて下さい。)
4. 重要なテーマを指摘する。(それを気づかせるようにしたいものです。)
5. 親がすぐ横で同じ問題を解く。(解きたいなら他の場所ですて下さい。)

4 タイプ別(性格別)で教え方を考える

断っておきますが、ここにあげた性格の方々が皆算数・数学が苦手と言うことは決してありません。甘えん坊でおっちょこちょいでも、算数が得意な方はたくさんいました。それから、どの性格にも、必ず両面があり、そこを考えて勉強方法や指導を一人一人に合わせることであったらいいなと思っています。

4.1 甘えん坊・寂しがりや

甘えん坊のお子さんの特徴として、次のものがあります。

1. 質問が多い.
2. 1人で勉強できない.
3. 集中力がない.
4. ミスに気づかない. 気づけない.

かわいなお子さんが、勉強で苦しんでいる姿は、親にとっても心苦しいでしょう。でも、テストのときに親はいません。先生もいません。結局のところ、テストで1人でできるようになりたいなら、普段から環境作りに配慮が必要です。ですから、少々つき離してでも、質問の回数を減らせるように訓練していきましょう。

僕の場合、最初は質問に丁寧に受け答えしながら、勉強の下地を作っていく、慣れたところで徐々に質問への回答内容を短く、簡潔なものに変えていきます。そうやってつき離していきます。「最近、先生が冷たい。」などと言われることもありますが、そこは心を鬼にします（笑）。

このタイプは、先生との言葉のやり取りをととても楽しみにしていることも多いので、授業中での声かけや、集中すべき時とそうでもない時をはっきりさせ、冗談が言い合える時間や、質問しやすい環境作りを心がけています。

ご家庭でも、一人で集中できる環境作りを作ってあげてください。ご両親も同じ問題を解いてみて、あとで意見交換するなんていうのも素敵だと思います。注意点としては、徐々に一人で勉強できる時間を増やすことです。

4.2 おっちょこちょい

計算スピードはあるが、精度がない。ケアレスミスが多い。そういったケースです。

小学生のうちには程度の差はあれ、皆ミスが多いものです。逆にミスが少ない子の方が稀ですから、必要以上に気にすることはありません。それよりも、スピードがあるのであれば、それをもっと磨くことの方がメリットがあります。スピードがあれば2回計算する時間をとれます。スピードが精度にも関わってきます。ですから、見直しの仕方をしっかりと教えてやること、その癖をつけてやることの方が重要です。

見直し4か条と僕が名前をつけたものがあります。

1. 逆算 （逆から計算して見直します。）
2. 別解 （別の解法で見直します。）
3. 概算 （四捨五入してだいたいの計算で見直す。1の位だけ確認する。）
4. 再計算 （同じ方法をもう1度する。）

これらのことを常に意識させます。お子さんの矛盾をつくときに、これらのことを用いてついでに試みて下さい。いや、お子さん自身にさせてみて下さい。

スピードはないが、おっちょこちょいであるといったケースもあるかもしれません。しかし、おっちょこちょいも才能です。おっちょこちょいであれば、即断即決して間違えることが多いはずで、つまりスピードの才能は持っているのです。ですから、百マス計算やこの *HP* の反射テストで徹底的にスピードをつけましょう。おっちょこちょいのままでかまいません。スピードと見直し癖をつけてやるのが有益でしょう。

4.3 集中力がない

百マス計算やこの *HP* の反射テストを多くさせて下さい。重要なことは、単純で簡単な作業を数多く解かせること、時間を計ってプレッシャーを与えること、以上2点です。

集中力がないのは、先が見えていない、想像力がないことの表れでもあります。先が見えるためには計算力も必要です。単純作業ですべきことを限定させます。解ける問題を確実にできるようにすることが最初に考えるべきことです。また、問題のアプローチの確認も重要です。その問題で最初に何をするかわかれば、手が動くようになり、集中力は維持されるでしょう。

周囲の変化に敏感で集中力がないケースもよくあります。これは女の子で多く、仕方がない面もあります。しかしこの場合も処方箋は一緒です。単純作業で目の前のことに集中させましょう。

たいていの場合、こういったお子さんは、集中力がない代わりに、周囲のことに敏感で、思いやりのある子も多いと思います。目の前の作業に集中する代わりに、他のことを考えるということも、実は想像力という算数・数学で一番大切なことの素質を持っているという捉え方もできるでしょう。集中力は年齢をおうごとに時間も質も程度が上がっていくので、その手助けとしての単純作業を毎日すること、息抜きの時間を与えてやること、受験生になったら厳しいかもしれませんが、*ON* と *OFF* の癖をつける手助けは必要でしょう。

4.4 作業が遅い

作業スピードを上げるため、時間を決めての単純作業を毎日繰り返すこと。上の「集中力がない」場合と対処法は基本的に同じです。

ただ、作業が遅いことは、単純に悪いことではありません。とても丁寧で几帳面な性格の方で、作業が遅いケースがあります。こういった場合は、むしろ長所に注目しています。丁寧な作業は、場合の数や規則性の問題などでの作業に秀でています。そういった長所を見つけ、褒めてあげることで、得意な単元を見つけてやることも重要です。

4.5 空間認知能力が欠けている

こればかりはある程度は仕方ありません。受験問題を作成する側は「空間認知能力がある生徒」が欲しいのです。空間認知能力というものは、年齢が進むにつれて上げることがますます困難になるため、すでにそれを持っている生徒を集めたい。しかも空間認知能力を測る問題というものの作成は難しくありません。答えを出すことが難しても、問題を作ること自体は簡単です。

したがって私が指導する場合も、典型的な問題をとれるように訓練する。なるべくいろいろな問題にふれさせて経験値を積ませる。そういったスタンダードなものになります。難問はとれなくても構わない。そう割り切りましょう。そのうち力が付いてきたらとれるようになる可能性もありますので、ベストよりもベターを考える現実的な指導を心掛けましょう。

4.6 その場ではできる

教えてもらったことがすぐできる。理解力が速く、要領はいい方。でも、すぐ忘れる。単元別の定期テストは良くても、総合演習・過去問では点が取れない。

人間は2,3週間ごとに記憶を刺激することによって、長期記憶を作りやすいと聞いたことがあります。2週間前の問題を1つ2つ解くだけでも効果があります。それから最初の一步を強く印象付けてやることも重要です。文章題なら図・表を描くといったことを学習時に繰り返すこと。最初の一步が進み、手が動くと思ひ出しやすくなります。HPにある格言集も参考にしてみてください。

4.7 プライドが実力とかけ離れている

人間たいていはプライドと共に生きているのでしょう。男の子はプライドが分かりやすいために、プライドが高いと言われがちですが、女の子も見せないだけで皆プライドがあると思っています。

最悪のケースは、プライドを充足することができず、苦手意識だけが残り、「数学なんて社会に出てから使わない」、「単純計算ができればそれで十分」などとうそぶき、果ては自分の子供にまでそれを押し付けるといった事例もあります。「私に似て、あなたも数学は苦手ねえ」なんて言うてはいけません。そういった何気ない一言が、また数学嫌いを生みます。負のスパイラルを作ります。どうか止めて下さい。せめて「難しかったけど、楽しかった」くらいでお願いします(笑)。

指導経験から、カンニングが多いのもこのタイプです。カンニング癖については言いたいことがたくさんあるので、別項を作りました。

このタイプは、プライドの高さを学習意欲につなげることができれば、一転していい循環が生まれます。性格を考慮し、アメとムチをうまく使い分ける必要があります。そのために、適した難度の問題を与える事です。答えが出た時の根源的な喜びに気づかせ、プライドが充足できる

よう褒める。うまくいかなかった時は、ヒントを小出しにしながら、自分の力で解けたと実感を得られるよう工夫する。で、調子に乗ってきたところで、ムチ！この繰り返しを、フレキシブルに行うのが理想です。生徒の力を把握しながら、難しすぎず簡単すぎない問題を的確なタイミングで与える。ええ、とても難しい指導です。毎日実感しています(笑)。

ちなみにできる子のほとんどはプライドが高いです。逆にそのプライドの高さを利用して、「答えを見るなんて、負けを認めたと同然だろ」というようなことを言いながら、考えることの価値や、できた時の実感を感じてもらえるよう刺激していくといいでしょう。

4.8 カンニング癖がある

テストの時のカンニングだけでなく、宿題などの家庭学習において解答解説との付き合い方も含めての話です。

例えば、「過去問をやってきて」という宿題を出した時、分不相応に高い点数を見せてくれる生徒さんはよくいます。こちらは生徒の実力を把握しています。でもその場で「点数が高すぎる。カンニングしたか？」なんてことは言えません。でも、こちらは分かっています。解答を見た。×なのに○をした。時間制限を無視した。こういったものを全て含めてここでは「カンニング」としてお話を進めていきましょう。

これは保護者が気づくのは難しいことかもしれません。ここだけの話ですが、次の項目で5つ○がみついたら可能性大です。

1. 成績(特にテストの点数)が不安定。
2. テストの復習をしない。
3. 宿題で解答解説を丸写しすることが多い。
4. 保護者面談の時に、悪い時を基準に志望校を考えましようと言われる。
5. うちの子に限って、カンニングなんかするわけがないと思っている。
6. 成績が悪いと叱る。
7. うちの子はプライドが高い。
8. 自分(親)のプライドが高い。
9. うちの子はわかったふりをすることが多い。
10. うちの子は甘えん坊。

ちなみに、偏差値で20以上の乱高下があったら危険度大です。それから念のためですが、絶対ではありません。私の経験則から、カンニング癖のある子に当てはまる項目を列挙してみただけです。ご容赦下さい。

中にはカンニングが悪いことという認識がないケースまであります。うまくいかないことに慣れていない。親に怒られるのが嫌、ないしは親や先生に褒めてもらうために、結果だけでもつくるおうとします。理由自体は悪くないことです。むしろポジティブと言えます。結果が出ず、自らのプライドを守るために、カンニングに走ってしまう。

程度の差は無視すれば、多かれ少なかれカンニングを全くしないという人はいないのではないかと思います。隣や前に座っている人の答案が目に入る事があります。「あれ、俺の答えと違うな」そう思って、再度確かめてみた。もしくは「あいつ間違えてるな」なんて心の中で笑った。「これは単純なケアレスミスだな」なんて自分を慰めながら、答えを消しゴムをかけて書き直す。なんてことまで含めれば、皆やったことがあると言えるでしょう。

危険な悪循環をたくさん見てきました。カンニング癖のため最後まで算数の楽しさもわからず、塾で「お客様」になっているケースや、親のプレッシャーに押しつぶされそうになりながら、必死にもがいているケース。

カンニングできないような環境作りをしない先生の側にも責任があります。ただそんな環境作りをしても根本解決にはならないでしょう。例えば、席の配置を決め、生徒間の距離をとり、常に目を光らせても、それはその時のテストだけです。解答のある宿題を渡されたら、カンニング癖のある子は自分で解かずして答えを丸写しします。じゃあ宿題の解答解説は全て取り上げ、常に周囲がその子の勉強を管理しましょうか。小学校低学年ならともかく、高学年なら一人で勉強できるよう徐々にシフトさせるべきです。親が過保護に関わったり、親が徹底的に管理するケースを何回も見てきました。受験の成功だけが目的があればそれでいいでしょう。でもそういった子たちが、進学してから苦労した・してることを私は知っています。特に中学受験ならば、まだまだ挽回可能。ここで失敗しても命に関わる問題ではありません。

子供が精神的に幼い場合、親や先生の管理はある程度仕方ないでしょう。しかし親がべったりの受験勉強というものはおすすめしません。厳しい言葉で言えば、そういったご家庭は「親も含めて」まだ受験には時期尚早と言えます。子供は親のプライド充足のための道具ではありません。周囲の世間体が気になるかもしれません。「周りが皆私立受験するから、うちも」というのは「最初の一步」としては悪くないでしょうが、行かせてみて「まだ早いなあ」と感じたら、当面は通信教育などで一人で勉強できるよう癖をつけていくことをおすすめします。親が勉強ができるからといって子供もできるわけではなく、親が苦手だから子供もできない何てことは決してありません。その時の自分の子供に適した選択肢を探しながらも、長いスパンでの教育というものも常に意識する必要があります。

とりあえず親のプレッシャーのかけすぎということについて思っていたことを述べてしまいました。ちょっと極端になってきた気がするので、バランスをとるために逆の話もしましょう。プレッシャーが全くないのも問題です。親が子供に無関心では困ります。よくあるケースで、片親は熱心だがもう片親は無関心なんてご家庭も結構あります。役割分担がはっきりしてるという利点はありますが、極端すぎるのは困ります。このへんのバランスの取り方は各ご家庭で解決して下さい(笑)。昔家庭教師をしていた時にご両親の不和に巻き込まれて困った時もありました。子供の性格も含めてベストなバランスは変わってきますが、何事も程度の問題と、そのご家庭・お子さんに適した受験勉強スタイルを構築する努力は常々考える必要があるということでしょうか。

話が逸れたので、戻しましょう。カンニングをやめさせる事は実は難しくありません。カンニングがどれだけカッコ悪くて、無意味を通り越して、害悪しかないと実際にあった例を通して話してやればいからです。生徒の良心と行為の利害。この二つに訴えかければ大抵は改善されま

す。さらに、カンニングをされると先生も困ること。「何がわからないか、先生がわからない」事を伝えます。こういったことを授業の小テストのたびに伝えていけば、自然となくなっていくます。

先生と立場からすると、こういった事は受験学年の最初の方に徹底して言う必要があります。昔残念なケースがありました。受験直前のことです。私が初めて担当した生徒がカンニング癖がひどく、もう対処法もない。「受験でもカンニング頑張れよ」と言えるわけがありません(笑)。本人が必死な分、悲しくもあり、滑稽でもあります。

もし保護者の方が「うちの子怪しいかも」と感じたら、不正というものに関して長い目で見たら損をするということを伝えてみて下さい。直接「カンニングをするな!」と叱ることは現行犯でない限りできませんから、自分の体験談でも他人から聞いた話でも交えながら、最後に「そういうことをする人はパパは嫌いだなあ」なんて感じでもまとめてみたらいいと思います。勉強以外にも、どのご家庭でも、子供の不正を指摘することは難しいことでしょう。実際にしていないことで怒られる理不尽は誰でも経験したことがあると思います。私も子供側・先生側の両方で苦い経験をしてきました(笑)。

4.9 真面目だができない

います。でも大抵の場合はしっかりやっています。上の「カンニング癖」の項でも言いましたが、答えを写してできた気になっている子。「わかる」を「できる」にできない子。復習がわかっていない子。

ではどう対処するか。もっと時間をかけて勉強する。それは違うと思います。勉強の質を変えるのです。最初は少量で構いません。できる問題を増やしましょう。そういう勉強を周囲がサポートしなければいけません。

まず間違いが悪いことではないことを教えます。ただしその間違いを復習しないならば、それは悪いことになります。わかるまで考える。わかったらそれを類題で確かめてみる。私が作っている反射テストは必ず2ページ目が類題になっていますので、この手順を試すいい教材になると思います。それらを繰り返しながら、ノーヒントで答えまで出せる問題を増やす。やや難しい問題にチャレンジして、「最初的一步」の質を上げる。そういったことを繰り返すのです。

ちなみにこの「できない」という評価は、相対的な判断にすぎないことが多いです。断言しますが、私が教えて「できない」ままの子はいませんでした。ただ周囲の伸びほどできるようにならないため、周囲と比べると「できない子」になってしまう。そういった意味で「相対的」という話です。でも算数・数学の力については、悲しいことに、現在の日本の受験制度は生徒の絶対評価を測る物差しがありません。絶対評価の物差しとして「数検」というものがありますが、「10年かかって数検3級をとったよ」ということを世間は評価しないでしょう。「逆に10年かかってそれ?数検3級って高2レベルだろ。アホなんちゃうか」なんて言う人もいるかもしれません。私の邪推でしょうか。こういった評価の仕方が危険な事は、自戒も含めて忘れていけないと思います。

4.10 できる子

最後に「できる子」について考えたいと思います。

彼らにも色々なタイプがありますが、共通して言えることは、復習をちゃんとしています。当たり前の話になって恐縮です。模試、授業内の小テスト、テストと名がつくものを最優先で直す。この地道な作業が一番です。ですから、私の評価も復習をしてるかが一番先にきます。ただその内容が的確なものであるかを復習ノートを見て一瞬で判断する事は難しい。(難しいが大体わかります。でも絶対ではありません)で、またテストで測る。の繰り返しです。

どんなできる子でも、「1を聞いて10を知る」なんて子はいません。「1を聞いて2を知る」子もいません。見たことありません。「1を聞いて0.9を知る」子は天才と言われる部類です。私の経験則から言ってもそんな子は2%もいません。「1を聞いて0.7を知る」くらいでとてもできる子でしょう。0.5で十分です。「1を聞いて0.3を知る」くらいが平均ですが、これは復習したものの3割くらいは次できるということになります。それでも復習の質をあげれば「できる子」になります。なぜか。3割できたということは、7割できなかつたということです。でも直しをきちんとすれば、次は7割の7割、つまり約半分ができただけで済みます。この計算でいけば、4回復習すれば3/4はできるということです。地道な努力を継続的にできる子が「できる子」になるのです。